

えがお

第21号

令和3年10月6日発行

- 発行／一般財団法人 神戸在宅医療・介護推進財団
- 住所／〒651-1106 神戸市北区しあわせの村1-18
- 電話／078-743-8200
- FAX／078-743-8211
- ホームページ／<http://www.kzcc.jp/>

～限りなく 人にやさしい「保健」と「医療」と「福祉」を～

一般財団法人 神戸市在宅医療・介護推進財団は、神戸市医師会、こうべ市民福祉振興協会、神戸市の三者が設立しました。医療・保険・福祉の連携を図るとともに、地域包括ケアシステムの構築をめざし、在宅医療・介護の連携を推進しています。

ごあいさつ

一般財団法人 神戸在宅医療・介護推進財団 理事長 細谷 亮



わたくしたちの財団は、神戸市における地域包括ケアシステムの推進団体で、医療と介護の橋渡し役を果たしています。現場での最近の最大の関心事は新型コロナウイルス感染症です。ワクチン接種2回完了者が全国民の50%超となった現在、「ウイルスとの共存、ウィズコロナ時代」に舵を切る規制緩和の動きがあります。本当にそれでよいのでしょうか？

緊急事態宣言の発令と終了が繰り返され、その度に新たな感染の波が出現しています。

それがRNAウイルスの変異によるもので、次第に感染力の強いものに置き換わってゆく傾向にあり、全世界的なものです。今回の国内第5波はデルタ株によるもので、ワクチン未接種者の感染の波だといわれていますが、イータ株、カッパ株とギリシャ文字の変異株が続きつづいています。もう一つの問題は、ブレークスルー感染(ワクチン2回接種者の感染)で、しあわせの村の医療福祉施設でも計3名の職員に起きています。我々に接種したワクチンは重症化を予防する効果は極めて高いものの、感染予防効果がそれ程ではないことに起因します。いずれも他の職員や入院患者・施設利用者の皆様への感染は起きていません。それは、職員と患者のワクチン接種率が96%を超えていることと、マスク・手指消毒の厳守・三密の回避・飲食時の会話禁止などの感染防止策が徹底されていることによります。「ウィズコロナ時代」になっても、当分の間は、ワクチン接種以前と同じような厳重な感染防止策を守る以外にないという覚悟です。

前号に引き続き本号でも財団各事業におきますコロナ感染症対策を取り上げています。「次の波をつくらない」という職員全員の思いが伝われば幸いです。

コロナ禍の中での経営研修を実施しました



令和3年8月18日に経営研修を実施しました。当財団初の試みであり、理事長以下、各部署の管理職など計30名が研修に参加しました。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、現在の財団がどのような経営状況であるか、今後の対策などについて職種関係なく、共通認識として理解することを目的としたものです。

この研修を受け、各職員が意識改革を図り、現在、経営改善に取り組んでいるところです。

神戸リハビリテーション病院

新しい医師が就任しました（令和3年4月1日）



4病棟 医長 石田 哲也

この度、ご縁頂き4月から神戸リハビリテーション病院4階病棟に配属された石田です。これまでは横浜市立大学医学部整形外科に所属し、大学の医局人事で市中病院に派遣され、就労研修して参りました。最後の14年間は神奈川県大和市立病院整形外科に所属していました。定年退職を受け、加えて市大整形外科医局も退局し、今般、細谷先生ほか皆様にお世話になることになりました。

整形外科医としては関節外科とか脊髄外科とかサブ・スペシャリティを求められていますが、私は、「日本整形外科学会認定整形外科専門医」を習得しただけです。スタッフの少ない一般病院では、症例を選択することはできず、困難な症例は紹介することとし、所謂なんでも屋を目指していました。

4階病棟ではほぼ常に病棟に張り付いています。横浜市立大の研修制度は当時スーパーローテーション制を取っており、経験はなかったのですが、きっと内科研修医はこんな感じで研修していたのだらうと想像しています。骨折の過重負

担や脊髄の装具については、患者さんの疼痛や筋力を元にした判断が、レントゲン写真より早く情報収集ができると考えています。なんと言っても疼痛はリアルタイムに教えてくれます。遅延なく運動負荷を増強していく予定です。

当院は通常の外来がありませんので、紹介により成り立っています。したがって、皆様の御協力を必要としています。ご賢察の上よろしくをお願いします。

リハ訓練機器 HAL (Hybrid Assistive Limb) を導入しました！



病院ではこの度、身体機能を改善、補助拡張再生することができる世界初の装着型サイボーグ機器を導入しました。人が運動する際に発生する生体電位信号を拾い、意志に沿った動作を実現する機器です。麻痺などにより四肢の運動に障害が出た人の機能改善を図ることを目的として使用します。訓練の様子の動画はホームページからもご覧いただけます。(詳しくは最後の頁のQRコードからチェックしてみてください!)

新型コロナウイルスの豆知識★

①換気の悪い
密閉空間



②多数が集まる
密集場所



③間近で会話や
発声をする
密接場面



新型コロナウイルスは、人と人の「距離」を2m(最低1m)空け、マスクを着用し、手洗いを丁寧に行うことにより、感染をほぼ防ぐことができます。人との適切な距離をとり、3密(密閉、密集、密接)を避け、部屋の換気を行い、マスクをつけて、手洗いや手指の消毒をこまめに行うことを心がけましょう。

また、「高齢者」「心臓病・糖尿病・腎臓病・免疫不全」などの基礎疾患をお持ちの人は感染すると大変危険な状態になりやすいので、みんなで気を付けましょう。

介護老人保健施設 リハ・神戸



リハ・神戸 事業活動の概要

心身両面で生活機能が低下し、自立生活が困難になった高齢者等の方に対して、医師・看護師・セラピスト・介護職・ケアマネジャー・管理栄養士・支援相談員等がチームとなり、日常生活機能等の維持・向上のための訓練・支援を行っています。入所・ショートステイ・デイケア(通所リハビリ)・訪問リハビリの各サービスを提供することにより、利用者の在宅復帰・在宅療養生活を支援します。

コロナ対策の取り組み

当施設では、兵庫県・神戸市からの要請に従い、高齢者施設における新型コロナウイルス感染防止対策として、入所者様への面会中止を継続しています。

面会できない期間が長期となり、ご不安が大きい中、ご利用者様とご家族様が、ガラス越しになりますが、近い距離で直接お会いいただき、少しでも安心感に繋がればとの思いから、7月18日・25日にはガラス越し面会を実施致しました。総勢 38組 119名のご家族様のご参加をいただき、ご利用者様も喜ばれ、非常に有意義な時間を過ごされました。



LINEビデオ通話の活用

引き続き、LINEビデオ通話によるオンライン面会を行っていますので、ご希望のご家族様は、ご活用ください。

デイケア(通所リハ)作品展について

コロナ禍ではありますが、“こんなときだからこそ”ということで、昨年度に引き続き、デイケアの利用者様が日々のレクリエーション活動で取り組まれた作品を用い、ご好評につき、第2回作品展を開催いたします。



行事食について

ご利用者様のお楽しみのひとつである施設内の行事食の一例をご紹介します。



開設記念日(天ぷら)



七夕(そうめん)



十五夜(ウサギ饅頭)



秋のお寿司バイキング



新型コロナ禍のフレイル(とりわけ社会参加の重要性)について

訪問看護・えがおの窓口・あんしんすこやかセンター

新型コロナウイルス感染症の影響が長期化する中で、『コロナフレイル』という言葉が聞かれるようになりました。神戸市の調査結果でも、昨年と比べ運動機能低下の割合は2.2%増、うつ傾向ありの割合は4.4%増、高齢者の外出機会が減少することによる※フレイルが進行していることが確認されています。

また実際に地域のあんしんすこやかセンターには「家族に家から出ないようにとされている。どんどん歩けなくなってきた。」「久しぶりに会ったら物忘れが進んでいる。」と本人や家族からの相談も増えてきています。

フレイル対策の3つの柱は身体活動(運動)、栄養(口腔機能)、社会参加(人との交流)です。特に人との交流が週に1回未満から健康リスクになると言われています。

しかしながら、コロナ禍で身近な地域の「つどい場」の活動が減ったことでますますフレイルの進行が課題となってきました。

魚崎南部あんしんすこやかセンターでは※地域ケア会議を通して課題を共有、コロナ禍でも安全に交流が出来る「公園deラジオ体操」を始めました。久しぶりに参加された方々からは「久しぶりに人と話せてうれしい、来るだけでも運動になるね、



情報ももらえて安心。」と開催の効果を感じる声があがりました。あんしんすこやかセンターが主となって始めた企画でしたが、今では地域の方が主体となって継続的に開催されています。

※地域ケア会議とは、地域住民と専門職が地域の課題を共有して一緒に考える場です。

※フレイルとは、年齢とともに心や体が弱くなり介護が必要になりやすい状態です。



お知らせ

あんしんすこやかセンターにはご自身でできるフレイルチェック表やフレイル検診を受けられる薬局等の情報提供、自宅に取り組める運動の紹介、地域の活動の場などたくさんの情報があります。

地域の方々と協働しながら高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らせるよう、感染対策を行ったうえで高齢者の総合相談窓口として活動しております。お気軽にご相談ください。

認知症対策課

新型コロナ蔓延禍での活動から

認知症対策課の神戸認知症初期集中支援チームは2017年4月より活動開始しています。

2020年度は新型コロナが蔓延し始めた年であり、2度の緊急事態宣言を受ける中でチームへの相談件数は170件でした(2019年度は165件)。相談件数の約8割は市内のあんしんすこやかセンターより受けています。

新型コロナの蔓延により新しい生活様式が求められ、地域の高齢者を対象にした地域や趣味の集まりなどは中止となり、外出機会が減少した生活により心身や脳の機能の衰えが加速、近隣者や家族との交流も減るなど、人との繋がりが持ちにくくなります。それに伴い認知症により生活機能が低下していることへの、気づきが遅れたケースなどが相談に上がってきています。

チームは認知症の疑いのある人や認知症の人その家族等に適切な医療・介護サービスなどに速やかにつないでいくという役割がありますが、既存の介護サービスだけでなく地域の集い場のような場所や地域行事の中止などで、つなぎ先がないとい

う事態も起こっています。

このように新型コロナ禍における新しい生活様式という環境変化は、早期診断・早期対応というチームの役割を果たす過程において、ケースをとらえる機会の遅れや適切なインフォーマルサービスにつなげない(つなぎ先不足)という事象を引き起こしています。時間の経過が認知症の進行を進めてしまい心身状況の悪化を招いていることもあります。

社会資源としての認知症初期集中支援チームはコロナ禍にあっても支援の体制を変えることなく、早期診断、早期対応に向けた支援を続けています。チームを利用してみたいと思われたら

身近な地域の
あんしんすこ
やかセンター
にご相談くだ
さい。

ここから
ホームページへ
飛べるよ →

